私の書道観

森田亀之助

○私の書道観

石川，富山両県を主としている玄土社という書道家のグループがある。その機関誌「玄土」に，何か感想を書けといわれた。

私も書は好きなので，極めて安直に承諾，寸閑を利用して書いたのが之で，学報に出す程のものでもないが，こんな肩の凝らない短文もあつてもよいのではないかと思う。

それに，これは書道観と題してあるが，理論的には，私の芸術観と考へられても一向差支へない。それから,此頃一般人のいう「解る絵」「解らぬ絵」などの理解にも，多少暗示的な働きをもつてるとも思う。本当は，之を敷衍して，もう少し細かく，弁明してみようとも考へたが，老来，そんな根気もなくなつたので，そのままにして置きました。

明治末期，私のまだ若いころ，ハルトマンの美学などが幅をきかした時分には*，芸術には，自由なものと，不自由なものがあり，前者が本当の芸術であるなどと言われていた。

即ち，真の芸術は，それ自体の目的を持つたもので，他の何ものにも拘束されない。謂わゆるアート・フオア．アート・セイクで，第一義的なものである，というのだ。これに対して，例えば，工芸品などは実用に役立つものという目的を持つているから，当然，それに拘束され不自由であるから，その美的要素は第二義的になる。それで羈絆芸術なんて称されたりした。

ところで，書はどうか。これは本来，意志，思想を伝える目的で工夫された符牒で，字の形態は必然的に或る約束を持ち，自由な形式表現が拘束される。従つて，その美的要素があるにしても，絵画や彫刻の如き，純粋な第一義的芸術ではない。一種の羈絆芸術，つまり工芸などと同列か，或は，それより格の低いものである。などという愚論を当時の美術週報という雑誌に私は書いたことを白状する。

やつぱり，若いうちは経験や思慮が不足である。いかに私が謂わゆる青二才であつたかを証明するもので慚愧に堪えない。

何故，私は以上の愚論を越えて生長したか，それは長い体験である，理屈で鑑賞はできない。感じて佳いものは佳いのである。佳いというのは，私に感激を与え，深く且つ高い世界に引き入れてくれ，幾度観ても飽きない，段々と滋味を増すといつたようなもので，而かも，そういうものは，芸術の種類には関係はない。底の見えすくような拙劣な絵画などより，奥の深い書幅を観る方が，鑑賞価値は優ると云える。

次に理屈を述べる。古今東西の美術を通観すると，芸術目的だけで——つまり第一義的意図で造られたものは，長い年月間殆んど無かつた。具体例は際限ないから，顕著なものを挙げれば，仏教美術，基督教美術などで，共に信仰対象，教義宣伝を第一目的として造られている。そして，しかも美事なものができている。

尤も，時代が降ると共に漸次，特に近代になつては，芸術はそれ自体の目的で作られるようになつたことは事実で，その結果例えば書の方でも文字としての約束を棄ててしまつた，謂わゆる墨象芸術など現われてきた。これが書道であるか無いかは問わず。一つの造形芸術の一体であることは認められる。が，それとは別に，書道から出発したが，全く自由になつたこの墨の芸術が実績において，前の不自由だつた書道芸術に比して，全体的に優れているかというと，そうはいえないことは確かである。

これは当然である。少くとも人間社会に絶対自由はあり得ない。例えば俳句，和歌それぞれ特異の形式に拘束される。私に云わせれば，多少窮屈な拘束のうちに，そのもつ特殊性を活し，自巳の自由な発想を如何に巧妙に表現するかというところに，微妙な味わいがあつて，それが，芸術価値に重要な働きをしているのではないかとさえ思う。ゴシツク彫刻を観ても，その寺院建築に従属，調和すべく苦心されたところに，特殊な美が現われたのである。

次に述べたいことは，第一義的芸術でも，第二義的芸術でも，観者の態度に依つて芸術価値が異ることである。茲に古い時代の有名人の尺牘があるとする。之をただ歴史的古文書として，その意味内容だけを重視する場合には，全く理智的な興味で観るので，芸術的鑑賞態度ではない。従つて芸術価値は問題にならない。然しそれ等の物に芸術的鑑賞態度で臨めば，なかなか芸術価値豊かなもののあることは，皆様もご経験のことと思う。

愚論も少々冗漫になつてきたので，結論に急ごう。以上の理屈で，私は文字の約束など棄てた墨象芸術も，芸術範疇の一つとして否定しない。だが書道芸術と謂えるか，どうか。

書道芸術の名を標傍するからには，矢張り意味のある文字を捨てない方がよくはないか。

亦，その文字の意味が文学的興趣のあるものだつたら二重の鑑賞基盤をもつことになり，一石二鳥である。

明治生れの私でも，色々な書体で読めないことが多い。然し，そんなことはかまわない。読める人だけが玩味すればよろしい。勿論，その形式が造形芸術として高遠な味わいを味あわしてくれればである。

＊ 森林太郎　大村西崖　編著　　審　美　綱　領　上下二巻（明治三十二年刊行）

森林太郎著　　審　美　新　説（明治三十三年）

このような美学書などが読まれた時代です。